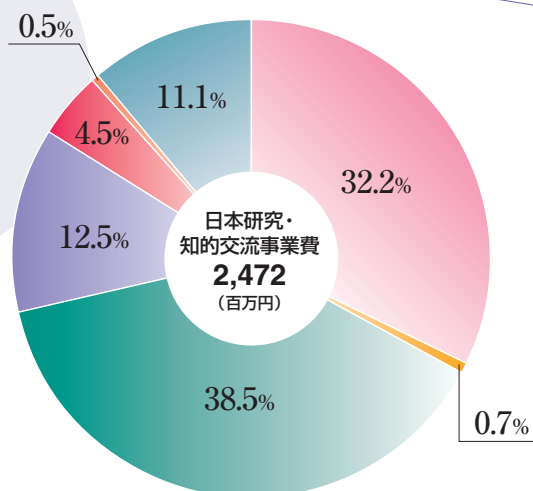


日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

日本人・日本社会への理解を深めるために、海外で行われている「日本研究」を支援しています。研究者に対するフェローシップの供与や日本研究機関への助成によって、日本研究を促進しています。さらに、世界が直面する共通課題の解決や、異文化間対話の推進を目的としたセミナーやシンポジウムの開催といった、知的交流事業も並行しながら、現代日本に対する偏りのない理解促進に努めています。

- アジア地域
- 大洋州地域
- 米州地域
- 欧州地域
- 中東地域
- アフリカ地域
- 全世界対象



知性を開く



国際シンポジウム&ワークショップ 「春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか」

◆作家・村上春樹氏の作品は、世界の30以上の言語に翻訳されています。今、“村上春樹”が世界の若者たちの共通言語になりつつあると言えるのかもしれませんが。そんな村上文学の魅力は何か？そのメッセージは世界の課題とどう影響しあっているのか？グローバル化が進む現代における翻訳の役割とは何か？2006年3月、これらの問いの探求に最もふさわしい翻訳家、作家、批評家が集まり、東京・神戸・札幌の3都市で国際シンポジウム&ワークショップ「春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか」が開かれました。

「東京プログラム」は、3月25日と26日の2日間にわたって行われ、750名の聴衆を集めました。まず米国で最も注目される作家のひとりであるリチャード・パワーズ氏による基調講演に続いて、世界の翻訳者によるパネル・ディスカッションが行われ、自国の村上作品の翻訳・出版状況と読まれ方、読者を魅了する理由、翻訳における特色やエピソードなどを語り合いました。

ワークショップ1「翻訳論」では、村上作品を題材に特定の文章の翻訳比較を試み、翻訳についての技術的な問題を考えるほか、村上作品を翻訳することの楽しさを語りました。ワークショップ2「表象論」では、文化表象論の視点から、世界の春樹ブームを検証し、各国での読まれ方の比較を通じて、海外受容の傾向を浮き彫りにしました。

村上春樹氏の母校、神戸高校では総合司会と基調講演を四方田犬彦教授が務めるディスカッションにて、各国の最新の春樹事情を語り合いました。

また、村上作品にゆかりの深い北海道(北海道大学)で、望月哲男北海道大学スラブ研究センター教授を司会に、各国での人気の秘密を語り合いました。

海の向こうの日本文学の読み手が村上文学をどう読んでいるのか。村上ブームが世界の読者の日本イメージをどう変容させているのか。グローバル化が進む現代における翻訳の役割とは何か。村上文学を通して新しいコミュニケーションの可能性を模索した、このシンポジウムの記録は、2006年10月、単行本として出版されました。

「世界は村上春樹をどう読むか」

- 国際交流基金企画
柴田元幸、沼野充義、藤井省三、
四方田犬彦 編
- 発行:株式会社 文藝春秋
- 定価:1,800円(本体1,714円+税)
- 四六判 320ページ



国際シンポジウム&ワークショップ「春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか」

案内人:柴田 元幸(東京大学教授)
沼野 充義(東京大学教授)
藤井 省三(東京大学教授)
四方田 犬彦(明治学院大学教授)

基調講演:リチャード・パワーズ(作家、米国)

■海外から参加した翻訳家・評論家(アルファベット順)
コリーヌ・アトラン(フランス) / アルフレッド・バーンバウム(米国) / アンヘル・ボヤドセン(ブラジル) / キム・チュンミ(韓国) / テッド・グーセン(カナダ) / エルデーシュ・ジョルジュ(ハンガリー) / ウェ・K・ホーマン(ドイツ) / メッテ・ホルム(デンマーク) / ジョンジョン・ジョハナ(インドネシア) / トマス・ユルコヴィッチ(チェコ) / イカ・カミンカ(ノルウェー) / ドミトリー・コヴァレーニン(ロシア) / ライ・ミンチュウ(台湾) / ファム・フー・ロイ(ベトナム) / リャン・ピンクアン(香港) / イワン・セルゲヴィッチ・ロガチョフ(ロシア) / セルゲイ・イワンビッチ・ロガチョフ(ロシア) / ジェイ・ルービン(米国) / イエ・フィ(マレーシア)

東京プログラム 2006年3月25日、26日

会場:東京大学駒場キャンパス
主催:ジャパンファウンデーション
共催:毎日新聞社
協力:東京大学文学部、大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

- 基調講演 リチャード・パワーズ(作家、米国)
- パネルディスカッション 翻訳者が語る、村上春樹の魅力とそれぞれの読まれ方
- 講演 翻訳本の表紙カバーに観る村上春樹/日本イメージ比較
- 講演 映像世界に見る村上春樹
- ワークショップ1/翻訳論「翻訳の現場から見る村上ワールドの魅力」
- ワークショップ2/表象論「グローバル化のなかの村上文学と日本表象」

神戸プログラム 2006年3月29日

主催:ジャパンファウンデーション、神戸市、兵庫県立神戸高等学校
神戸文学館開館準備記念「春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか」

札幌プログラム 2006年3月29日

主催:ジャパンファウンデーション、北海道大学スラブ研究センター
国際シンポジウム「春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか」



●シンポジウムとワークショップに2日間で、のべ750名の聴衆が集まりました。



●ロシアのドミトリー・コヴァレーニン氏は黒板に図解しながら村上作品の世界観に言及。



●基調講演を行うリチャード・パワーズ氏。

Beijing Center for Japanese Studies 北京日本学研究中心設立20周年記念国際シンポジウム

記念講演会、パネルディスカッション、分科会、ポスター研究発表などを開催。

◆北京日本学研究中心は中国教育部との協定に基づき日中共同事業として設立され、運営されています。2005年は北京日本学研究中心の設立20周年（および「大平学校」の設立25周年）にあたります。これを記念して「<日本的>の現在」をテーマに、記念講演会やパネルディスカッションを行ったほか、分科会やポスター研究発表などを開催しました。

記念講演「中日文化比較の一考察—『中国的』『日本的』の過去と現在」で、劉徳有氏は日本における“女子十二楽坊”の人気の秘密や、アニメの魅力、漢詩と俳句の比較など身近な例を引きながら、日本研究における伝統的な概念と最近の研究テーマや新しい認識を紹介。科学的な見地に立って、創造性に富んだ日本研究の重要性を強調するとともに「心と心の交流」について聴衆に語りかけました。

パネルディスカッションではアニメをテーマに、分科会では日本の文学や社会などを討論。

◆「ジブリアニメの力」をテーマとしたパネルディスカッションには、スーザン・J・ネイピア（テキサス大学教授）、

米村みゆき（甲南女子大学専任講師）、王 衆一（「人民中国」雑誌社副社長）のパネラー3氏に、北京日本学研究中心の秦 剛氏がコーディネーターとして加わりました。いずれのパネラーも、アニメを優れた日本文化のひとつとして捉え、中でもジブリアニメを高く評価した上で、日米のアニメ比較や、宮沢賢治の世界との関係など、興味深い認識と独自の考察を披露し、討論が展開されました。

分科会においては、日本語学・日本語教育学、日本文化・文学、日本社会・経済の3つの分野ごとに設定されたテーマのもと、18の会場で150を超える発表と討論が行なわれました。

また、シンポジウムに際し、ジャパンファウンデーションのJFサポーターズクラブから、ボランティア特派員として3名の会員を派遣しました。



●北京日本学研究中心

South Korea 日韓国交正常化40周年記念国際学術会議 現代日本学会「日韓関係の新しいビジョンを求めて」

日韓関係の歴史・現状・未来展望が、熱く議論された有意義なひととき。

◆韓国の社会科学系の日本研究者が中心となって構成している現代日本学会が日韓国交正常化40周年を記念して開催した大型の国際会議を支援しました（知的交流会議助成プログラム）。

この会議では3日間に、全体会議に加えて歴史・政治・経済・社会文化分野の12のセッションと企業家・政治家・軍事・安保専門家・言論人による4つのラウンドテーブルが開かれ、日本・韓国・中国などから約200名が発表者・討論・司会等として参加。約2,000名の市民・学生が来訪しました。会議の様子はテレビニュースおよび新聞の特集記事で報道されました。

会議の規模の大きさ、聴衆の多さは驚くほどでしたが、それぞれのセッションにおいて日韓関係の歴史・現状・未来への展望が、率直に、熱く議論されたことは非常に有意義でした。聴衆も分科会会場に入りき

れないほど訪れ、竹島、靖国神社、教科書問題などに起因する反日感情に対する心配をよそに、熱気あふれた、未来志向の会議となりました。

この会議において、日韓関係の良好な発展を期待する各界・各層の人々が一同に会して日韓関係の重要性を確認しあい、また、その重要性を社会にアピールすることができました。特に、会場には日韓関係に関心のある若者がたくさん訪れ、日韓の有識者の発言に熱心に耳を傾けていました。今後の日韓関係の発展を期待させる会議でした。



知性を開く

日・アラブ知的交流アジェンダ・セッティング会議 Exchange

日本とアラブ諸国の政策研究における共通課題を探る。

◆昨今、グローバル化の進展・深化に伴い、日本とアラブ諸国との関係も密度を増しつつあり、両者が一緒に考えなければならないテーマ、あるいは両者の協働が世界に貢献できる領域が立ちあわわてきています。

ジャパンファウンデーションとエジプトのアハラム政治戦略研究所は、これらの共通アジェンダ（課題）を設定するために、日本とアラブの主に社会科学系の政策研究に関わる有識者による討議を、2005年3月にカイロ、同12月に東京で実施しました。

「異文化間の誤解解消のためのメディアの役割と責任」「日本の近代化経験のアラブでの応用可能性」「アラブ地域、アジア地域にとって望ましい経済改革段階論と地域経済統合」「総合的安全保障の見地からの有効な日・アラブ間安全保障対話のあり方」「テロリズム等の政治性・党派性を帯びがちな概念の公正な定義」。

以上のような問題領域の各々について、共同研究、

人材育成等の具体的なアクションに結びつくような課題設定が試みられました。

ジャパンファウンデーションは、この討議の成果をまとめて、ウェブサイトなどで報告すると同時に、そこで設定された課題をめぐる国際的な共同事業を実施・支援していきたいと考えています。

また、カイロにおいても、東京においても、公開のシンポジウムや講演会を開催し、且つメディアでも報告することにより、日・アラブ双方の英知を多くの市民と共有しました。



第2回日-EUシンクタンク円卓会議 Japan EU Thinktank

人口減少や地域統合など、日本とEU諸国の共通課題について話し合う。

◆この会議は、2005年1月に東京で行なわれた「第1回日-EUシンクタンク円卓会議」に続いて、同年11月14-15日にベルギー、ブリュッセルで開催されました。



第1回に続き、ジャパンファウンデーション、総合研究開発機構（NIRA）、ベルギーのシンクタンクである欧州政策センター（European Policy Centre）の3者による共催です。

第1回では「グローバルガバナンスと国連改革」をテーマに専門家が議論しましたが、第2回はより具体的

に日本とEU諸国が共通に抱える課題について話し合うことを目的として、以下の2つのテーマ別セッションを設けました。

1. 「日・EUにおける人口減少」

猪口邦子内閣府特命担当大臣（少子化・男女共同参画）のメッセージによって幕を開けた本セッションでは、日・EU双方の専門から各地域の状況報告と課題をめぐる積極的な議論が行なわれました。

2. 「地域統合への欧州とアジアのアプローチ」

地域統合の世界的な機運を概観した上で、東アジアにおける地域統合の取り組みの現状と日本の役割、統合・拡大の成果をあげる一方で欧州憲法批准否決などの課題を抱えるEUの現状について議論を交わしました。

会議の要旨、政策提言、全参加者の発表内容を掲載した報告書は、研究機関や政策関係者などに広く配布されました。

日本研究フェロシップ、フェロー勉強会

JF Fellowships

◆ジャパンファウンデーションは設立当初より日本に関わる研究を行う学者、研究者を日本に招へいしています。このフェロシッププログラムによって、これまでに5,500人以上の海外の専門家が日本を訪れて研究や調査を行い、日本の専門家との人的ネットワークを築いてきています。

2005年度には公募で選ばれた、25カ国から137名の研究者及び博士論文を執筆する学生が来日しました。その研究成果の発表の場として、公開講座(フェロー勉強会)を基金本部と京都支部で企画実施しています。

基金本部では、マウリシオ・マルティネス氏(コロンビア・ロスアンデス大学講師)が「日本芸能に対するラテンアメリカの視点:スペイン語版インターネット日本芸能百科事典」というテーマで基金本部で研究発表を行いました。氏は、日本の舞台芸術について研究し、またスペイン語圏の人々に日本芸能を紹介するインターネットサイトを制作しています。この他、ルフラー・マンギ氏(パキスタン・シンド大学)による「冷戦後の日本の北東アジア政策」、アレッシオ・パタラーノ氏(フランス国立高等研究院)による「『赤レンガ』と『Z旗』:日本の海上自衛隊における帝国海軍の文化的職業的遺産の分析」など、5回の発表会が実施されました。

京都支部では、2005年度に18回の公開講座を、関西地域で開催しました。例えばデヴィッド・W・エジントン教授(カナダ・ブリティッシュコロンビア大学日本研究セ

ンター所長)による「『外人』も住民です!多文化主義、日本の都市とフィールドワーク」、秦納氏(中国・上海大学学報編集部編集長)による「上海と大阪 二大都市における地域社会教育に関する比較研究」、ホンドル・アンジェラ教授(ルーマニア・ヒペリオン大学)による「カルチュラル・グローバリゼーション時代の神楽」などの公開講座が実施されました。

フェロー勉強会のお知らせは、メールマガジンやホームページ上で行っています。



日本研究調査

Research

海外各国の著作や論文などの情報を収集。 日本研究を取り巻く環境を分析する。

◆海外の日本研究者、日本研究機関に対して適切な支援を行っていくためには、各国・各地域における日本研究の動向を把握し、支援ニーズを見極めていくことが不可欠です。ジャパンファウンデーションは随時「海外日本研究概況調査」を行い、一定期間ごとに「海外日本研究機関調査」を実施しています。

「海外日本研究概況調査」では、各国・各地域において実績をあげている日本研究機関、学会の最新動向、現在活躍している日本研究者についての情報、日本研究者のあいだで関心を集めている研究テーマ、社会に影響を与えた著作・論文などの情報を収集す

るとともに、各国の日本研究を取り巻く環境に関する分析などを行っています。調査結果は、各国・各地域の日本研究振興のための中長期的な方針策定や目標設定に利用しています。

2005年度は、前年度に引き続いて韓国、東南アジア、南アジア、米国および欧州において調査を行い、2006年度中に調査分析を完了する予定です。世界で最も多い日本研究機関、研究者を擁する米国は10年ぶりの本格的な調査となります。中南米(スペイン語圏)については2005年度に調査結果を出版しました。また、2005年度に新たに中東・北アフリカ地域での予備調査を実施しました。

知性を開く

日米センター for Global Partnership (CGP)



●ニューオリンズでのセミナーの様子



●「ソフトパワーとパブリックディプロマシー」会場の様子



●小学校でプレゼンテーションを行なうJOIコーディネーター



●NPOフェローの研修の様子



日米両国が国際的責任を分かち合い、世界に貢献するための協力を推進。

◆日米センター(The Japan Foundation Center for Global Partnership, CGP)は、日米関係をより緊密にし、日本が米国と協調して世界へ貢献することを目的に、1991年4月に発足、東京とニューヨークに事務所を設置しています。

地球規模の安全保障や広い意味での人類の福祉を確保するパートナーシップの確立を図るためにさらに大きな一歩を踏み出すべく、日米センターは活動を続けています。

神戸の復興：ニューオリンズおよび湾岸地域への教訓

日米の知見を持ち寄り

ハリケーン・カトリーナの経験に学ぶ・・・

◆2005年8月末に米国ルイジアナ州ニューオリンズ市周辺を襲ったハリケーン「カトリーナ」は、未曾有の被害をもたらし、災害予防・被災時対応・復興計画など多方面に課題を残しました。ニューヨーク日米センターでは2006年3月に、阪神淡路大震災の復興に携わった研究者、記者を講師として招いた表題のセミナーを開催し、市当局の復興担当者、米国連邦政府関係者、市民団体関係者など復興の現場に携わる人を中心に約110名の聴衆を集めました。

(共催：在ニューオリンズ日本国総領事館、ニューオリンズ世界問題評議会、市港湾局)

ソフトパワーとパブリックディプロマシー

国の魅力とは？—ソフトパワーを徹底討論。

◆「ソフトパワー」という概念の生みの親であるジョセフ・ナイ前ハーバード大学ケネディスクール学長に加え、安倍フェローの渡辺靖慶慶應義塾大学助教授、ローレンス・レベタ大宮法科大学院大学専任教員、近藤誠一外務省経済局審議官、ウィリアム・クロムウェル元米国外交官をパネリストに招き、ソフトパワー概念の定義やその日米比較が行なわれ、研究者やNGO職員に混じって、日本関連の研究を専攻する学生の姿も多く見られました。ソフトパワーは世界各国のパブリックディプロマシーの不可欠な要素だという議論は説得力をもって語られ、多角的な討論が交わされました。

(共催：ハーバード大学ライシャワー研究所、米国社会科学研究所評議会)

日米草の根交流コーディネーター派遣(JOI)プログラム

草の根交流で日本への理解を促進。

米国南部でコーディネーターが活躍。

◆JOI(Japan Outreach Initiative)は、日本との交流の機会が比較的少ない地域における草の根レベルの交流や日本理解の促進、さらに草の根交流の担い手の育成を目的として、米国(主に南部地域)へコーディネーターを派遣する事業です。

コーディネーターは、2年間にわたり、ボランティアとして、大学や日米協会など地域交流活動の拠点となる学校やコミュニティに派遣されます。そこで、日本の文化や社会に関するプレゼンテーションの企画、実施、アレンジに携わるほか、日米交流を深めるための活動を展開します。

2005年度には、新たに3名のコーディネーターをダラス/フォートワース日米協会(テキサス州)、南部多文化センター(ルイジアナ州)、コストル・カロライナ大学(サウスカロライナ州)に派遣しました。

安倍フェローシップとNPOフェローシップ

日米交流の新たな人材育成へ、

2つのフェローシップ。

◆「安倍フェローシップ」は、日米間や世界の知的交流を担う人材の育成、社会科学や人文科学の研究者の国際的ネットワーク作りを目的とした研究奨学金プログラムです(共催：米国社会科学研究所評議会)。

2005年度には16人のフェローを採用し、1991年の創設以来、230人を超えました。フェローによる研究を社会に還元するべく公開コロキウム「グローバリゼーションとインドのIT産業」などを開催しました。

一方、日本のNPOセクターで活躍する実務家を対象に、米国NPOでの研修機会を提供する「日米センターNPOフェローシップ」も実施しています。2005年度は3名が渡米しました。それぞれ途上国問題、労働に関する国際規約の発行、対立解決教育に取り組むNPOで研修に取り組んでいます。

日米センターの出版物

◆日米センターでは活動内容を報告書にまとめ、広く配布しています。PDFファイルでダウンロードできます。

http://www.jpj.go.jp/j/cgp_j/index.html

日本研究・知的交流事業概観

① 日本研究機関の支援

各国において日本研究の中核的な役割を担う機関が、日本研究の基盤を強化し、人材を育成するために必要な様々な事業を支援しました。

① 拠点機関に対する重点的支援

タマサート大学(タイ)など海外7カ国の日本研究拠点機関に対し、出版・訪日調査・共同研究の経費助成や図書寄贈などの重点的支援を行いました(12件)。

② 客員教授派遣

デリー大学、モスクワ国立大学等、海外日本研究機関等に対して専門家を派遣。また、派遣経費の一部を助成し、教育基盤の強化を支援しました(28件)。

③ 教員スタッフ拡充助成

日本研究機関に対して教育職新規雇用のための経費を助成しました(5件)。

④ 研究・会議助成

海外18カ国で、日本研究を実施する教育・研究機関、学会などが実施する国際会議等に助成し、研究者間の多層的なネットワークの形成と強化を図りました(42件)。

⑤ 北京日本学研究中心事業

北京外国語大学実施分では、日本人教授のべ25名を派遣しての講座運営のほか、大学院生・日本語教師の日本への招へい(31名)、研究・出版に対し支援しました。

北京大学実施分では、現代日本研究講座に日本人教授のべ13名を派遣したほか、大学院生・講座関係者を日本へ招へい(29名)しました。

② 日本研究フェロースhip(招へい)

海外27カ国64名の学者・研究者と14カ国36名の博士論文執筆者に長期フェロースhipを、20カ国37名の研究者に短期フェロースhipを供与することによって、日本での調査研究を支援しました。

③ 日本研究機関組織強化支援

研究者のネットワーク化・情報交換を推進するために、ロシア日本研究者協会およびヨーロッパ日本研究協会(EAJS)に対し、紀要発行、ウェブサイト運営経費などの支援を行いました(2件)。

④ 東南アジア元日本留生活動支援

元日本留学生の対日理解促進を目的として、アセアン諸国の元日本留学生協会の活動に対して支援を行いました(8件)。

⑤ ウェブサイト「JS-Net」の運営

海外における日本研究者同志のネットワーキングを支援するウェブサイト「Japanese Studies Network Forum(JS-Net)」を運営。2005年度にはサイトをリニューアルしました。日本研究関連の国際会議やセミナー等の開催情報、関連機関やデータベースのリンク集、参考図書の紹介等、研究に必要な各種情報を英語で提供しました。2005年度年間アクセス件数は14万件。

⑥ 「日本研究書目」の刊行

海外の日本研究者のための英文総合文献目録「An Introductory Bibliography for Japanese Studies」を刊行。主要文献を、人文・社会科学の各分野における日本の学術動向に関するエッセイと文献解題で紹介し、「社会科学編」と「人文科学編」を毎年交互に出版。2005年度には第14巻2号を刊行し、90カ国850機関に配布しました。

⑦ 図書寄贈

海外の高等教育機関を中心とする82カ国180機関に、日本研究に役立つ書籍の寄贈を行いました。



<http://www.jsnet.org/>



③知的交流会議などの開催・支援

国際的な知的共同事業を開催したり、会議開催経費や参加者旅費の助成による支援を行いました。

①村上春樹シンポジウム(26頁参照)

②日中韓次世代リーダーシップフォーラム2005

日本と中国・韓国の3カ国における将来のリーダーの間の信頼関係を醸成することを目指し、韓国国際交流財団、中華全国青年連合会と共催で開催。3カ国の政界、財界、学界、メディア界から若手リーダーが3カ国を共に訪問し、参加者間のディスカッション、各国指導者・政策担当者との意見交換、視察、シンポジウム等を行いました。

③沖縄国際フォーラム

「アジア・パシフィック・フォーラム沖縄」

アジア太平洋地域の若手リーダーたちを日本に招へいし、日本の関係者と共通課題について話し合う国際フォーラムを開催。2005年度は「多元的社会と共生～地球市民への挑戦」をテーマに公開セミナーを実施しました。(12カ国から18名の参加)

④知的交流会議助成

11カ国で開催される51件の知的交流を目的とする会議の開催費用を助成しました。

⑤国際会議出席者助成

国際会議等に出席する専門家の招へい、派遣の経費助成を計16件行いました。

⑨知的交流フェローシップ

①知的交流フェローシップ(招へい)

現代社会の世界共通の課題を扱う海外の人文・社会科学の若手研究者に、日本との知的対話のネットワーク構築を目的として、訪日調査、研究の機会を与えました(18件)。

②知的交流フェローシップ(派遣)

現代社会の世界共通の課題に関する人文・社会科学分野の調査・研究を奨励し、日本の研究者にフェローシップを供与して、海外に派遣しました(23件)。

③アジア次世代リーダーフェローシップ

アジア地域に共通する課題の解決に取り組むことのできる人材を育成するため、日本の非営利団体スタッフや大学院生を対象に、アジアにおける調査・研究のためのフェローシップを供与しました(6件)。

④小渕フェローシップ

日米両国政府の合意に基づく「小渕沖縄教育プログラム」の一貫として、アジア太平洋地域と米

国の相互理解と関係強化のために設立された米国の研究所「東西センター」での共同研究のため、人文・社会科学分野の、沖縄の研究者等に対してフェローシップを供与しました(5件)。

⑤アジア・リーダーシップ・フェローシップ(ALFP)

アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム開始10周年を迎えた2005年度は、これまでにアジア諸国から同プログラムに参加した54名のフェローのうち、12カ国から39名が福岡と釜山に会し、コミュニティとしてのアジアが抱える現状と歴史的側面を含めた課題について語り合うユニオン(同窓会)を実施しました(2005年6月26日～30日)。「Asia as a Community: Concept or Reality?」を総合テーマに、アジアという概念をどのように捉えるか、歴史と記憶の問題を乗り越え地域の安定化に向けていかにアジアの市民社会に協働の動きをつくれるか、グローバル化による様々な影響とアイデンティティの問題、オルタナティブな声を汲み取るメディアの役割、といった幅広いトピックについて様々な視点から意見が交わされました。また、プログラムの10周年を記念して、ALFPでは過去にプログラムに参加したフェローの最新情報を集めたALFP Alumni Directoryを発行しました。

⑩アジア地域研究センター支援

東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP)

東南アジア諸国における東南アジア研究の促進と各機関の学術ネットワークの構築を目的に東南アジア4カ国の8大学のプロジェクトを支援しました。

また、東南アジアの学生に対する東南アジア研究の講義「アジア・エンポリウム」をタイにおいて開催。6カ国15名が参加。

⑪日米センター

①知的交流プログラム

日米知的交流の担い手の拡大をめざし、グローバルな課題を扱う日米共同研究・対話プロジェクトを32件支援しました。

②市民交流プログラム

日米間の地域・草の根レベルの交流プロジェクト26件に対して、助成を行いました。また、米国各地で推進される地域活動を支援するため、26件の小規模助成を行いました。

③教育を通じた相手国理解促進プログラム

米国における日本理解、日本における米国理解を、初等・中等レベルで促進するプロジェクト8件に対して、助成を行いました。

